

「今」を前向きに生きる

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

残暑厳しい日々が続きます。年とともに暑さ寒さが身にこたえるようにもなりました。しかし私は、「ああ暑いな」と思うたびに、よく先師が言われた「その時その場の心」ということを思い出します。

早く涼しくならないものか、なぜいつまでも暑い日が続くのかと不満に思う。これではいけないのであります。夏とは暑いものであり、この暑さこそ豊作の条件でもあるのです。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩にあるように、寒い夏ほど不幸なものはないのです。暑ければ、暑さもまたよしと受け容れて、暑さをしのぐ工夫をすればよい。そして、為なすべきことに励むだけです。

「その時その場の心」にそぐわない心とは、何もしないで現状に不満ばかりを持つことです。こうあって欲しいと思うばかりで、「今」を前向きに生きようとしなないことです。

オリンピックのマラソンで二つのメダルをとった有森裕子ありもりゆうこ選手が、長い不遇時代を克服できたのは、小出監督の一言でした。何事であれ「せっかく」と思うこと。それが彼女の人生を変えたといわれています。

「せっかく」怪我をしたのだから、ゆっくり休んで明日に備えよう。「せっかく」失敗したのだから、これ乗り越える工夫をしよう。つまり、「せっかく」暑いのだから、この暑さを活用しようという精神、それが、とりもなおさず「その時その場の心」というものなのです。

暑い日差しを避けたり、風通しをよくしたりするために、昔の人は実にいろいろな工夫をしました。すだれ、風鈴、朝顔、打ち水、浴衣、団扇、蚊帳、どれもこれも実に風情があつてよいものでした。暑さをしのぐというよりも、暑い日々を積極的に楽しむ工夫が生活の中にあふれていました。

それがエアコンの普及で、そうした暑さを楽しむ工夫はすっかり姿を消してしまいました。しかも、それと軌を一にして、私たちは「その時その場の心」の大切さを忘れ去ってしまったようです。

リモコンを操作するだけで簡単に暑さ寒さから逃れることができる。そのために、その時その場に依じて、あれこれと工夫して、快適な心をつくりだす力を無くしてしまったのです。

暑さ寒さばかりではありません。生活全般が便利になり、ほとんどのことが予想通り、思い通りに展開するため、状況を判断し、時に応じた対応や工夫をする必要がなくなりました。そのため、私たちはひどく鈍感になり、「気づき」の能力や生きる力を衰弱させてしまったのではないかと気になります。

例えば、昔の子どもたちは仲間の顔ぶれや場所に依じて遊びをつくり、夢中になって遊んだものです。仲間みんなが楽しく遊ぶことができるゲームを瞬時に考え、ルールを定め、仲間の合意を得て遊ぶ。そこには話し合いがあり、同意があり、渾身の努力がある。それが遊びというものであったのです。

それが今では、コンピュータに設定されたシミュレーションゲームで遊ぶだけです。ゲームの中身はあらかじめ設計されたもので、その時その場とは無関係です。何度やりなおしをしても文句を言う仲間もおりません。無表情なディスプレイがこちらを向いているだけなのです。気に入らない展開になれば、

電源を切ってしまえばよいのです。そこには真剣な状況判断も創意工夫の必要もありません。

大人たちも、大方は「その時その場の心」と無関係な生活を送っています。なぜなら、人と人とが真剣に対峙する機会、「生の状況」で向き合う機会がほとんどないからです。相手が何を考え、何を望んでいるかを、できるだけ考えないですむようになっていのが現代の「便利で快適な」生活なのです。

例えば、家族一人一人の個室、食事をしながら見るテレビ、挨拶のない職場、コンピュータに向き合った無言の仕事、自動販売機、マニュアル通りにしかしゃべらない店員、インターネット・ショッピング……。いずれも、人間を相手に、その時その場の状況を判断し、気づいたことをすぐに行なう必要がありません。自分の世界にだけ閉じこもっていればよいのです。

テレビには、行ったことのない土地や経験したことのない場面が映し出されます。私たちは、「生の体験」をしないまま、編集された虚像によって、操作された知識を吹き込まれているのです。

しかしこれは、恐ろしいことです。最近の子どもがすぐに「キレル」といわれるのも、こうした「その時その場の心」を育てることを忘れた日常と無関係ではないと、私は思います。

瞬間瞬間の状況に正しく積極的に反応する訓練がなされていないために、自分の思い通りではない状況に出くわすと、それに正常な対応ができずに、極端で異常な反応をしてしまうのでしょうか。

遊びであれ勉強であれ、日常の生活においてであれ、私たちは常に予期せぬ状況に出合う可能性はいくらもあります。どんなに科学が発達しても、私たち人間は明日を読むことはできないのです。

だからこそ、今日この瞬間の、「その時その場の心」を大切にしなければならぬのです。後悔することがないように、誠実に真心こめて「今」を積極的に生きなければならぬのです。

ある対談で、明治維新の志士ベスト一〇を選んできました。ところが、出席者三人のうち二人が、坂

本龍馬が大嫌いだとききおろしています。なぜかというと、龍馬には先見の明がないのです。大政奉還は月形洗蔵の受け売りで、船中八策は横井小楠の原作。暗殺されたのも、先見の明がなかったからだ、と。しかし、これは不思議な議論です。幕末の志士といえども人間です。そのうち何人が次の時代を正確に予想できていたのでしょうか。多分一人もいなかったのではないかと思えます。

龍馬をこきおろす人たちは、その後の歴史の推移を知っている人たちです。龍馬と同じその場で正しく未来を予想して、龍馬が間違っていると云っているのではないのです。

龍馬をはじめ、維新の志士たちが偉かったのは、わずかばかりの先見の明があったからではありません。彼らが「その時その場の心」で懸命に誠実に時代を生きたからです。一身を投げうってまで、その時その場で最も正しいと思つた道に挺身した、そこに頭が下がるのであります。

最近、最新の科学理論やコンピュータを駆使して論評する人が増えました。未来はこうなる。だからこうでなくてはいけない。そう、おっしゃいます。では、ご当人はそのために何かをなさるのかというと、ただ、世はかくなると自信たつぷりに予言し、今の状況はなっていないと非難するばかりです。

もしかしたら、彼らには先見の明があるのかもしれないと非難するばかりです。しかし、だからといって、私は彼らに与しようとは思いません。なぜなら、彼らが「その時その場の心」を持っているとは思えないからです。コンピュータを尊敬する人はいないのと同じです。「明日どうなるか」よりも、「今」を精一杯誠実に生きることに、そのほうがよほど大切だと私は思います。

そして、「その時その場の心」に沿って、ただ懸命に生きる人のほうが、鋭く明日を見抜く先見の明の持ち主よりも、はるかに幸せになれるだろうと、私は確信しております。そのことは、明日の理屈よりも「今の実践」に邁進された多くの先輩たちの豊かな人生が証明してくれています。